

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 小川 明子

本論文「声なき想いに物語を：対話的・協働的デジタル・ストーリーテリングの理論と実践」は、1990年代以降欧米を中心に草の根的に広がったデジタル・ストーリーテリング（以下、DST）の歴史とその実践状況を明らかにし、メディア論の観点から理論的に分析することで、現状のDSTをモデル化し、課題を浮き彫りにし、それらに応えるための新たなDSTプログラム「メディア・コンテ」をデザイン、実施し、その成果からDSTや地域メディア、メディア・リテラシーへの提言をおこなう内容となっている。

DSTとは家族や身近な地域の思い出、出来事を、デジタル技術を使って物語り、地域で共有する営みのことであり、地域や学校のワークショップで、デジタル化した古い写真や、デジカメやケータイで撮った写真などを使ってスライドショーを作り、自分でナレーションを入れ音楽をつけたりして数分間の物語に仕上げ、ウェブで公開し、公共施設で上映会をしてみんなで分かち合う。

小川の論点は、これまでのDSTがすでにできあがった物語のデジタル化に過ぎなかったのに対し、人には誰にも「声なき想い」があり、それらに物語という様式をもたらすための対話的で協働的なプログラムを新たに開発することにある。「メディア・コンテ」というプログラムによって、これまで自ら積極的に表現しなかったより多くの人々が、個人や家族、地域のアイデンティティを（再）構築し、社会との連関や記憶の伝承を図っていく可能性を示したのである。

### ■構成と概要

論文は、序章と終章をのぞき、大きく「調査・理論編」と「実践編」の2部構成になっている。

最初に、従来の地域メディア論、市民メディア論等の限界を示しながら本論の問題関心のありかを示している（序章）。

「調査・理論編」では、まず、1990年代初頭以来のアメリカ、イギリスを中心に展開したDSTの歴史をたどり（1章）、医療とミュージアムにおける典型的な活動事例の分析を行っている（2章）。これらの知見が本論文の土台となっている。

次に、DSTを成り立たせている物語という様式と、写真、声という構成要素を検討し（3章）、生活綴方運動など過去のストーリーテリング実践を吟味することを通じて、DSTプログラムに必要な活動要素や仕掛けを見出している（4章）。

「実践編」は、本論の中核をなしている。まず、ここまでの歴史的、思想的検討を踏まえ

て、従来の DST では希薄だった対話と協働を重視し、すでに語るべき内容を持った一部の人のためではなく、「声なき想い」をかかえた大多数の人に向け、それらの想いに物語という様式を与えるための DST プログラム「メディア・コンテ」を提唱する（5章）。このプログラムを岐阜県可児市の在日外国人の子どもたちに提案しておこなった「メディア・コンテ可児」の事例研究（6章）と、愛知県日進市に拠点をおく障がい者の NPO とともにおこなった「メディア・コンテ・ハッピーマップ」の事例研究（7章）が続く。その成果から「メディア・コンテ」の成果と限界を検証している（8章）。

最後に、論文全体をまとめ、「メディア・コンテ」から DST、地域メディア論、市民メディア論、さらにはメディア・リテラシーに対する提言をおこなっている（9章）。

## ■評価と議論

(1) 内外の DST の歴史と実践に関して丹念な調査をおこなっており、少なくとも邦語文献としては最もまとまった内容となっている。従来の DST 研究がワークショップ実践の実務的検討のレベルに留まっていたのに対し、メディア論を基軸とし、物語論から心理療法にいたる多様な領域の研究を涉猟し、なおかつこれからの地域メディア論、市民メディア論などへの提言を持ちうる質量にまで深めることに成功している。

(2) DST 実践の一般的なモデルをつくり、諸実践の成果を踏まえ「メディア・コンテ」の新規性を示すことに成功している。従来の社会科学的方法論（たとえばライフヒストリー研究など）との関係性の吟味が不十分であるなど残された課題はあるが、実践に本格的に向き合った先端的なメディア研究として評価することができる。

(3) 本論文は、コミュニケーションが生む社会的規範を、いわゆる「近代の大きな物語」としての「公共圏」（J.ハーバーマス）の規範枠組みからではなく、より実践的な次元で解明しようとしている。そのために、市民同士のインターアクションによって生まれる「パブリック圏」（池上英子）という概念を用いて論じたことは、積極的に評価された。他方で、全体的構図のなかに本研究を位置づける抽象力がやや弱く、事例に比して議論の深化が一部、不十分である印象も否めない。今後は、論文で用いた諸概念装置のより深い吟味が必要だろう。

(4) 2つの「メディア・コンテ」実践の成果の分析が複合的調査方法でなされているが、その方法論的吟味をもう少し深めれば、それらの実践から見出せる知見はもっと拡がったはずである。また今回は「声なき想い」に照準したが、今後はいわば「声ある人々」に対して本プログラムにどれほど効果があるかなどの検討を加える必要がある。

以上のような評価と議論がなされたが、論理構成がしっかりした論文であり、DST 領域における「メディア・コンテ」の新規性や意義は十分に認められ、本論文が内外の DST、地域メディア、および市民メディアに関する研究と実践、さらにメディア・リテラシーなどの領域に貢献しうる実践的メディア研究であると評価された。

本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断する。